

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	綱井 勇吾
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	環境情報学部・教授 今井 むつみ
	副 査	政策・メディア研究科委員	総合政策学部・教授 古石 篤子
	副 査	政策・メディア研究科委員	環境情報学部・教授 田中 茂範
	副 査	同志社大学文学部・教授	赤松 信彦
学力確認担当者：			
<p>綱井勇吾君から提出された博士論文は、「外国語学習者による語の意味の獲得に関する研究 - 英語の「壊す／切る」系動詞を例として - 」と題し、6章から成る。</p> <p>【論文審査の要旨】</p> <p>異なる言語は異なる基準で世界を名づけ分ける。したがって、外国語の語の意味（語意）を習得するという事は、母語とは別の基準で世界を名づけ直すことに他ならない。従来の研究により、母語よりも目標言語の方が細かく語を使い分ける場合、成人の外国語学習者は母語を基盤に目標言語を運用しがちになり、目標言語の成人話者と同じ意味表象を持つのは容易ではないことが明らかにされてきた。しかし、目標言語と母語の関係は一樣ではない。母語の方が目標言語よりも細かく語を使い分ける場合もあれば、その逆もある。母語と目標言語が同じ程度の細かさで語を使い分けるが、切り分け方が異なる場合もある。本研究では、目標言語と母語がどちらも細かく語を使い分ける場合に、成人の外国語学習者がどのように目標言語による語を使い分け、どのような意味表象を持つのかについて、目標言語と母語の関係により外国語の語意学習プロセスが異なるのか、どのような場合に目標言語による語の使い分け方の学習が困難になるのかという問題を実証的に検討した。検討にあたっては、理解と産出という二つの異なる指標を用いて二つの実験を行った。題材には、日本語、英語ともに比較的多くの動詞を持ち、細かく語を使い分ける。つまり「目標言語と母語がどちらも細かく語を使い分ける領域」である「壊す／切る」系動詞に関連する概念領域を使用し、実験対象者には、日本人上級英語学習者を選んだ。</p> <p>産出実験では、日本語母語話者、英語母語話者、日本人英語学習者に、「壊す」「割る」などの動詞で表される場面（モノに力を加えてモノの形状や機能を破損させる場面）をビデオクリップにして見せ、どのようにそれぞれの場面を名づけ分けるのかを比較した。その結果、日本人英語学習者は英語の成人母語話者とは異なる基準で語を使い分けるが、同時に日本語の成人母語話者とまったく同じ基準で英語の語と語を使い分けているわけではないということ、さらに、英語の習熟度と英語の語の使い分け方の獲得には直接的な結びつきがないことが明らかになった。理解実験では、産出実験の結果を裏づけ、さらに抽象的な場面における語の使い分け方の問題を解明するという目的のもと、英語の「壊す／切る」系動詞を題材に、英語母語話者と日本人英語学習者に動詞と目的語名詞を総当たりで組み合わせさせたさまざまな英文を見せ、英語として自然な文かどうかを尋ねた。そして、英語母語話者による語と語の意味関係の理解の仕方と日本人英語学習者による語と語の意味関係の理解の仕方がどのくらい似ているのか比較した。その後、日本語母語話者にも同様の実験を日本語で実施し、日本人英語学習者における英語の語と語の意味関係の理解の仕方に、母語である日本語がどのような影響を及ぼしているのかを調べた。その結果、日本人英語学習者は英語母語話者と同じ意味表象を持つのは難しいが、日本語の語と語の意味関係の理解の仕方をそのまま英語の語と語の意味関係の理解の仕方に反映させているわけではないことが示唆された。</p> <p>本研究の結果は、成人学習者の場合、母語を基盤に目標言語の意味推論を行うので目標言語の使い分け方にも母語の影響が強く見られる、という従来の見解とは異なる知見をもたらし、目標言語と母語の関係の違いや題材とする意味領域により外国語の語意学習プロセスが異なる可能性を示すことができた。</p> <p>以下に、本論文における各章の内容を要約する。</p> <p>第1章 序論として本研究の背景、目的、対象、そして特色と新規性について述べた。</p> <p>第2章 研究の理論的基盤を議論した。とくに、語意を語と語の関係のなかで捉え、語意の獲得を語の</p>			

論文審査の要旨及び担当者

No.2

- 使い分け方の獲得まで考えていく必要性について述べ、その上で、外国語の語意学習における母語の影響について検討した先行研究を概観し、先行研究の問題点と本研究の意義を整理した。
- 第3章 モノに力を加えてモノの形状や機能を変化させるさまざまな場面をビデオクリップで作成し、まず日本語と英語がどのように語を使い分けられるのかを産出実験を通して実証的に検討した。その上で、日本人英語学習者が、英語をどのように使い分けられるのか、目標言語である英語による使い分け方と母語である日本語の使い分け方にはどのような関係があるのか、英語の習熟度に応じて英語の使い分け方も変化するのか、という問題を検討した。
- 第4章 英語の「壊す／切る」系動詞を題材に、日本語を母語とする上級英語学習者が、目標言語である英語の語と語の意味関係をどのように整理しているのか、その際、母語である日本語の影響がどのように見られるのかを理解実験（受容性判断）により検討し直した。
- 第5章 従来の研究と本研究の産出実験および理解実験の調査結果を踏まえ、外国語の語意学習プロセスにおける心理的基盤、および外国語の語意学習プロセスにおける母語の影響の仕組みについて総合考察を行った。
- 第6章 本研究の限界と今後の課題と展望について議論した。

本研究の新規性と成果は、下記のように要約できる。

【新規性】

1. 外国語の語意習得研究では目標言語に固有な意味を獲得していくことが重要であると考えられている。しかし、ほとんどの研究が1つの語を題材としたものであり、語の意味を同じ意味領域に属する他の語との関係として捉え直し、語の使い分け方までを含めて外国語の語意学習がどのように進むのかを実証的に検討した研究は本研究が初めてである。
2. 従来の研究では、目標言語と母語の関係により外国語の語意学習プロセスにおける母語の影響の仕組みがどのように変化するかについては十分に議論されてこなかった。本研究では、目標言語と母語がどちらも細かく語を使い分けられる場合に目標言語による語の使い分け方の獲得がどのように進むのかを実証的に検討し、同じ実験パラダイムを用いた既存の研究と比較することで、どのような領域のどのような場合に語の使い分けが難しくなり、どのような場合に母語の影響が見られやすくなるのかという問題を再考した。
3. 本研究では、成人の外国語学習者が目標言語に対してどのような意味表象を持ちがちであるのかを産出実験と理解実験を組み合わせることで詳細に検討し、従来、産出データからのみ議論されがちな目標言語による語の使い分け方の獲得という問題に対して新たな知見を提供し、産出と理解という二側面の関係にまで示唆をえることができた。
4. 第二言語環境下ではなく、外国語学習環境下において目標言語による語の使い分け方の獲得がどのように進むのかを検討した。

【成果】

1. 目標言語と母語の関係により語意の獲得しやすさや母語の影響の仕方が異なり、目標言語と母語の関係に応じて外国語学習プロセスが変化する可能性を示した。
2. 目標言語と母語がどちらも細かく語を使い分けられる場合、成人の外国語学習者は目標言語と母語とも異なる基準で目標言語の語を使い分け、目標言語に対しては目標言語の成人母語話者とも母語の成人母語話者とも異なる意味表象を持ちがちになることを示した。

本研究は、綱井勇吾君が高度な研究遂行能力と当該分野における十分な学識を有することを示すものである。また、その研究成果は外国語の語意学習プロセスの心理的基盤の解明、及び外国語の語意学習教材の開発に大きく貢献することが期待できると考えられる。よって、本学位審査委員会は、綱井勇吾君が博士（学術）の学位を受ける資格があるものと認める。